



# 禁煙ジャーナル

■発行・たばこ問題情報センター [発行人/編集長・渡辺文学] URL <http://www.tbopic.org>

No. 213

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 2-1-4 九段セントラルビル 203 TEL: 03-3222-6781 FAX: 03-3222-6780  
 (郵便振替口座番号) 00120-0-159803 【印刷所】遠藤印刷 1部 400円

## 判決迎える「横浜タバコ病訴訟」 AP通信社が世界中に配信 ~Japan Times も8月7日号で~

2005年1月19日に提訴した「横浜たばこ病訴訟」が、今年6月24日に「結審」しました。この日、AP通信・影山優理記者がこの裁判を傍聴したあと、原告の水野雅信氏にインタビューを行い、その記事が世界中に配信されました。影山記者は、「おそらく1000社以上のメディアが、この記事に掲載していると思います」と語っています。国内メディアがほとんど無視する中、大幅に遅れている日本のタバコ規制の「チェンジ」に向けたタバコ病裁判の現状を世界中に知らせてくれたことは、特筆すべき出来事と言えるでしょう。「Japan Times」も、8月7日号で、この記事を全文掲載しましたので、AP通信社の了解を得て紹介させていただきます。翻訳してくださった大山浩朗氏、監修の水野修身氏、穂積忠夫氏に厚く御礼申し上げます。(編集長・渡辺文学)

### 日本の喫煙習慣に法廷で挑戦

#### ■小魚対クジラの闘い

原告のひとりとはがん患者である。もうひとりの原告は、未亡人が訴訟継承者として出席している。3人目は肺気腫を病んでおり、鼻から酸素の管を引きずりながら、車椅子に乗ってゆっくり法廷に入る。

その3人の日本人は、世界で最も喫煙者に優しい国において、巨大タバコ産業を相手に、「小魚対クジラ」の闘いを展開している。先例による限り、彼らは敗訴することになりそうである。しかし、彼らは、自分たちの訴訟によって、少なくとも、タバコの危険性が注目されるようになればと期待している。

仮に彼らが勝訴したとしても、いまだに政府が半分を所有している、かつては独占企業であった日本たばこ産業(株)の財政状態(収入)をへこませることにはならないだろう。この3人が求めているものは、年間6兆8千億円を売り上げる会社から、合計3千万円である。

彼らは、自分たちのより大きな目標が、さらに喫煙を抑制して減らすこと、そして「タバコが病気の原因である」という、世界の多くが今日当然のこととして認めている見解について法的・社会的な支持を得ることにある、と語っている。

#### ■遅れている日本のタバコ規制

彼らの道のりは長い。欧米で勢いを得てきた断固とした喫煙阻止の動きは、ほとんど見られない。禁煙の酒場や飲食店はほとんどない。昨年ようやく子供たちの中での喫煙を抑制するため、自動販売機からタバコを買う場合にタスポという名のスマートカードが必要になったばかりである。

20本入り1箱の価格は通常300円で、ニューヨーク価格の3分の1よりさらに安価であり、しかも、その約60%が税金である。

他の諸国は、目立つ文字で恐ろしいほどの健康への警告を表示し、また、死んだ子供、壊疽に侵された足、ボロボロになった歯の写真を添えている。ここ日本では、小さい字で「喫煙は肺がんの原因のひとつとすることがあります」と表示されているだけだ。

副流煙? 「喫煙は、周囲の人たち、特に乳児、幼児、年配者に有害な影響を与えます、喫煙するときは、どうか周囲の人たちに気を使ってください」と警告されている。

日本たばこ当局者は、依然として、受動喫煙の問題性をはっきりと否定し、危険があるのは灰皿に残されたタバコの吸いかけから生じるのであって副流煙ではない、と主張している。

\*—2面に続く—

# Japan's smoking habit runs into court challenge



Yuri Kageyama  
Yokohama

Our plaintiff is a cancer victim. Another is represented by his widow. The third has emphysema and rolls into the Yokohama District Court in a wheelchair with tubes trailing out of his nose.

The three people are waging a minor, yet bitter, battle against Big Tobacco in one of the world's most smoker-friendly countries.

Precedent suggests they will lose, but they hope their suit will at least draw attention to the dangers of smoking.

Even if they win, they're unlikely to dent the finances of Japan Tobacco Inc., a former monopoly still half-owned by the government. The three are asking for a total of ¥30 million from a company with ¥6.8

trillion a year in sales.

Their larger goal, they say, is to gain stronger curbs on big and legal and social acceptance of a notion that much of the world now takes for granted: that smoking makes you sick.

They have a long way to go. There's little of the concerted discouragement of smoking that has gained momentum in the West. Few bars and restaurants ban smoking. Only last year, to curb smoking among children, did the taspo smart card become necessary to buy cigarettes from a vending machine.

A pack of 20 usually costs ¥300, less than a third of New York prices, and about 60 percent of it is tax.

Other countries print dire health warnings in bold letters and add pictures of dead babies, gangrenous feet and crumbling teeth. Here, in small print, they say "Smoking can be one of the causes for lung cancer."

Secondhand smoke? "Tobacco smoke has a harmful effect on people around you, especially infants, children and the elderly. When smoking, please be careful of those around you," the warnings say.

Japan Tobacco officials still flatly deny passive smoking is a problem, arguing that the dangers come from burning cigarettes left in an ashtray, not secondhand fumes.

The corporation has argued in the Yokohama District Court that it has no case to answer because smokers are free to quit anytime, smoking is legal and cancer has multiple causes. It's the same defense that gained it victory the last time it was taken to court, in 2003.

The current case began in January 2005. Since then, plaintiff Kenichi Morisuta has filed of pneumonia and bacterial infection at age 75, leaving 67-year-old cancer patient Kōryōshi Takahashi who has the lung, and Masao Mizuno, the emphysema patient, a former mechanic who is also 65 and smoked from age 15 to 51.

With final arguments over, the ruling is slated for Jan. 20. Although the case has attracted little media attention, there are signs that even Japan is beginning to kick the habit.

Among adult males, the number of smokers has been falling and now stands at 39.4 percent compared with about 24 percent in the U.S., according to the health ministry and the American Lung Association.

Cigarette ads no longer appear on TV, although Japan Tobacco gets on the air with ads that discourage tossing butts on the street or in trash cans.

There are more smoke-free bars and areas on train platforms. Some communities have passed ordinances allowing small times for smoking on streets.

Smoke-free bars and restaurants are enough of a novelty to have spawned a backlash against "smoker-bashing."

In April, a major restaurant chain opened Cafe Tobacco, a Tokyo coffee shop billing itself as a haven for smokers. It has proven popular among customers such as 28-year-old Kousuke Kishi, who takes his coffee with a Marlboro's Light. "I don't want to live an extra year or two giving up what I

love to do," said Kishi, 28, manager at a restaurant.

The lawsuit remains steeply uphill. The court has ruled that cigarette ads are not a "false" or "misleading" advertisement, and that the advertising phrase "Enjoy healthy" is not a "false" or "misleading" statement.

In the U.S., President Barack Obama has signed a law empowering the Food and Drug Administration to regulate tobacco products, and while that has gotten little attention in the Japanese media, Obama's own struggle to quit smoking has been an inspiration to Mizuno. "Times have really changed," he said. "The people's victory is near."

Listen up: Emphysema patient Masanobu Mizuno appeals to passerby in June outside the Yokohama District Court.

【写真＝とげぬき地蔵尊・来馬明規住職が作った「禁煙法被」を着てマイクを握る水野氏】

## \*—1面からの続き—

この会社が横浜地方裁判所で主張してきたことは、本件は賠償すべき事案ではない、なぜなら喫煙者がタバコをやめるのはいつでも自由であり、喫煙は合法であり、がんの原因は複合的だからだということである。これは、2003年、前回訴えられた裁判で日本たばこが勝訴した抗弁と同じ抗弁である。

### ■日本のメディアはほとんど無視

今回の訴訟は、2005年1月に始まったものである。その後、共同原告の森下賢一氏は、肺炎および細菌感染症のため75歳で亡くなり、残されたのは肺を半分失った高橋是良氏(67歳)と、肺気腫の患者で、15歳から51歳まで喫煙を続けた元機械工だった水野雅信氏(同じく67歳)である。

最終口頭弁論を終え、裁判官は1月20日の判決言渡しを宣言した。

この訴訟は、報道機関にはほとんど注目されてこなかったけれども、日本がこの習慣をやめさせ始めつつあるいくつかの兆候がみられる。

日本の厚生労働省およびアメリカ肺協会の資料によると、成人男性の間では、喫煙者数は減り続けており、アメリカの約24%に対して日本では現在39.4%という状況である。

### ■テレビCMは自主規制だが

日本たばこ産業(株)は、路上やゴミ箱に吸殻を投げ捨てないようにとの広告をラジオではしているが、タバコの広告はもはやテレビに登場することはない。

禁煙タクシーや駅のプラットフォームを禁煙にしているところは以前より増えている。路上喫煙に罰則を課す条例を制定している自治体もある。

禁煙のバーや飲食店は「喫煙者たたき」の動きへの反発を引き起こすほどの目新しいものである。

4月に、ある大手のレストランチェーンがタバコ・カフェをオープンした。東京にあるそのコーヒーショップは、喫煙者の安息所として宣伝されている。そこはマルボロライトを吸いな

がらコーヒーを飲む、きし・こうすけ氏(28歳)のような顧客の間で人気がある。

「やりたいことをやめてまで、もう1、2年余計に長生きしようなんて思っていないさ」とこの28歳のコンサルタント会社の経営者は語った。

### ■オバマ氏の署名とコメントに注目

この訴訟は、タバコにさらなる強い警告を表示すること、タバコの自動販売機設置を禁止すること、タバコの依存性と有害性を認めるよう求めている。

「私がタバコを吸い始めた頃は、男性の約80%が吸っていた」「宣伝文句は、“今日も元気だ、タバコがうまい”だった」と水野氏は語った。

アメリカでは、バラク・オバマ大統領がFDA(食品医薬品局)にタバコ製品を規制する権限を付与する法律に署名している。そのことも日本の報道機関にほとんど注目されることはなかったが、タバコをやめるためのオバマ自身の苦しい闘いは、水野氏にひとつのインスピレーションを与えた。「時代は実に変わってきた。私たちの勝利は近い」と彼は語った。

【翻訳＝大山浩朗氏(横浜たばこ病訴訟を応援する会・見守る会)／監修＝水野修身氏(前防衛大学校英語教授)、穂積忠夫氏(弁護士)】

\* (注1) 小見出しは編集部でつけたものです。

\* (注2) オバマ大統領が禁煙に苦闘している(もがいている)姿は、10代半ばで喫煙を始めた人間がどんなに依存から抜けだし難いか全世界に知らしめました。まさにこれこそ法廷外から、JTの「依存は軽い。いつでもやめられる」という法廷証言を、大統領の体験と事実が打ち砕くものです。さらにブッシュ前大統領によって批准が拒否されてきた「タバコ規制枠組み条約」をふまえて、連邦レベルでの規制法が制定されたことは画期的チェンジです。こうなると、JTと国の勝ち目はますますなくなるといえるのではないのでしょうか。